

# 寺田寅彦の翻訳書

アーレニウス原著『史的に見たる科学的宇宙観の変遷』

大森 一彦

岩波文庫の〈春のリクエスト復刊〉の1冊として、アーレニウス著・寺田寅彦訳『史的に見たる科学的宇宙観の変遷』が、2017年2月21日に復刊された(日付は奥付記載)。これはいかなる本か。まずは『岩波文庫解説総目録 1927-1996』により内容を見てみよう。

北欧の科学者アーレニウス(1859-1927)は、宇宙の創造・生成・進化・滅亡等に関する人間の観念が、諸種の原始民族の間に発生し成長し、幾多の紆余曲折をへて今日にいたる宿命的経路を、文学的にしかも科学的に克明に展開してくれる。北欧の神話、インドの伝説、日本の物語等の詩文にはじまり、近代の天文学的宇宙論にいたる科学史である(前掲書。中巻。1997。p.565~566)。

初版は昭和6(1931)年10月の本である。寅彦の翻訳した本が、今なお読書人の関心と呼びリクエストされ、出版社がそれに応じて復刊するのは、この本の魅力と価値の高さを示しているものといえるだろう。この機会に、本書の周辺情報を整理して紹介してみたい。

## A. 成立事情

この本の成り立ちを示す寅彦サイドの記録は、いたって少ない。わずかに、進行の節目にあたる情報の断片が、「日記」に見え、親しい友人に宛てた「手紙」で語られているので、おおよその途中経過を窺う事が出来る。以下に新版『寺田寅彦全集』(岩波書店)から抄出する。

(1) 昭和2年(1927)。8/12の日記に：

… 岩波に行き主人の案内で松住町末初に行く。… Arrhenius, Das Werden des Weltes [sic] の翻訳をすゝめられる。… (『全集』22巻。p.147)。

とあるのが事の始まりであろう。著者は留学中に訪問した旧知の科学者、寅彦は考えてみようと言つて本を持ち帰ったものと思われる。それより半年後、翻訳作業は始っていた。

(2) 昭和3年(1928)。2/15付け 小宮豊隆宛の3枚続きのハガキの1枚目に：

謹啓 扱て岩波文庫の翻訳、平生独逸語をいゝ加げんにゴマカシて来た天罰テキメン時々始末に困る箇所に逢着、どうか助け舟を願ひます、扱て次頁の文句ですが、…(『全集』28巻。p.18~20)。

とあり、2枚目にタイプライターで原書からドイツ文7行を抄記して、翻訳上の不明の個所を質問している(『全集』はハガキを写真版で示す)。同じく小宮宛同年3/4付けの手紙にも：

… 例の翻訳に Hesiod の著書 “Werke und Tage” といふのが引用してあり、此の書名の意味不明、『著作と時代』とでもいふのかと思ふが書物が一体どんな本だか分からないからあぶなくて困り候、御示教を願ふ方捷徑と存じ候、… (『全集』28巻. p.26~27)。

と訊ねている。この時は文庫出版の3年半余り前のことであるが、既に訳業は着々と進行していたことが分かる。ところが、それから2年近く経ったある日の手紙には、驚くべき事態が出来たことが報じられている。

(3) 昭和4年(1929)。12/4付け 小宮豊隆宛の手紙。

… 岩波文庫に約束したアレイニウスの宇宙開闢論史やと五分の四位訳したが、原書の出版元へかけ合った結果、大分金を出さなければいけないらしいので、多分岩波ではやう出さぬ事と思はれ、半ばホット安心、半ば拍子抜け、考へると馬鹿[ら]しくもあるので訳稿は風呂の焚物にしようかと勘考中。(『全集』28巻. p.218~219)。

そうになったら大変だ。その結果を読者が知るのは2年9か月後のことだ。

(4) 昭和6年(1931)。8/15付け安倍能成宛の手紙。

アレイニウスの宇宙開闢論史の翻訳(岩波文庫) やつとの想で完了、原稿を渡してホット致居候。

(『全集』29巻. p.58~59)。

とあり、2日後の8/17付けの小宮豊隆宛の手紙でも同様のことを伝えている。詳細は不明だが、翻訳権の問題はクリアされ、訳稿は「風呂の焚物」にならずに済んだ。訳稿は、出来上った分からその都度引渡されたものと想像される。それが、この手紙の数日前に一切終わったというのであろう。岩波書店は万全の態勢で臨んだものと思われ、細々とした編集作業、2種の索引の作成、印刷、校正は驚異的な速さでとり運ばれた模様で、8/23付けの中谷宇吉郎宛の手紙で近況諸事を列挙し「アレイニウスの訳の岩波文庫校正中」と報じている。かくして、奥付に記された〈昭和6年10月15日発行〉より、それほど遅れることなく(推定)、278ページの、小冊子ながらずっしりと重い1冊がめでたく上梓の運びとなった。

.....  
**史的に見たる科学的宇宙観の変遷** (岩波文庫 774-775)

スワンテ・アーレニウス [Svante August Arrhenius] 著. 寺田寅彦訳.

東京・岩波書店. 昭和6(1931). 10. 15. ￥0. 40.

15. 7×10. 4cm. 紙装. 角背.

序 7p. 目次 3p. 本文 237p. 人名索引 5p. 事項索引 16p. 訳者附記 4p. 図版 10 枚.  
.....

(5) 寺田正二の「父の書齋」

寅彦の次男 正二 が父を回想し、身近で見た訳業の進行の様子を書いている。その時彼は静岡高校を終え、東大独文科に入学した頃のこと、関心の持ちようはさすがである。

昭和五六年の頃この机の上にはいつもアレニウスの『史的に見たる科学的宇宙観の変遷』の原本と訳稿とが載ってゐた。出勤前と帰宅後の零細な時間がこの仕事に捧げられてゐるらしかった。時々窺いて見たがごく少しづつしか進捗しないので、いつ終ることやらと考へてゐる中に二夏程たつと完成したので成程と感心してしまった（『父の書齋』。「新風土」6巻2号。1943. 2. p. 23～29）。

**B. 原書の確認**

本書には初版以降 翻訳に使った原書が何であるかが明示されず、「訳者附記」にも言及はなかった(註)。扉のウラに書誌データが記載されたのは、戦後の [改版] 1刷(昭和26. 12/15 発行) 以後のことである。この情報を手がかりにして (同じ本) を図書館で探してみた。

(註) : 本書は旧版『全集』(第1～2次) に全文が収められたが、そこにも原書のデータは記されなかった。

■著者 Svante August Arrhenius. ■書名 Die Vorstellung vom Weltgebäude im Wandel der Zeiten: das Werden der Welten, neue Folge. ■版 4. bis 6. vermehrte und verbesserte Auflage [増補改訂版(4-6刷)]. ■出版地・出版者 Leipzig : Akademische Verlagsgesellschaft. ■出版年 1911. ■構成 Vorwort(序文) p. [III] ~VIII. Inhaltsverzeichnis(目次) p. [IX] ~XII. Text (本文) p. 1~200. Personen-und Autoren-Register(人名索引) p. 201~203. Sach-Register(事項索引) p. [204] ~206.

■サイズ たて 23. 2 ×よこ 16. 0 cm. □東北大学附属図書館医学分館所蔵.

**C. 「訳者附記」の情報**

巻末に「訳者附記」(文末に「昭和六年八月下旬」とあり) 4 ページがあり、原著者アーレニウスの研究業績、アーレニウスの印象、先行の訳本、翻訳上の問題点、研究の進展による内容の陳腐化と訳者の立場、の諸点が、簡潔かつ明晰に述べられている。

## (1) 寅彦以前の訳本

先行する訳本につき「此書の翻訳としては先に亡友一戸直蔵君の『宇宙開闢論史』がある。これは久しく絶版となって居るのであるが、…」と述べている。一戸直蔵(1878～1920)は天文学者で科学啓蒙家(寅彦と同年生れ)。東大講師から故あって在野の人となり、雑誌『現代之科学』を創刊した。寅彦も2回寄稿している。さてその『宇宙開闢論史』を見た。標題紙には、一戸のほか小川清彦の名が共訳者として出ている。

東京 大倉書店。大正元年(1912)10月10日発行。 ¥1. 80.

訳者序・原著者序 20p. 目次 9p. 本文 340p. 附録 24p. 索引 8p.

たて 22.5 ×よこ 15.0cm. クロス装。 □東北大学附属図書館本館所蔵。

菊判のずっしりと重い堂々たる大冊である。本文の冒頭部分を比べてみよう。

■一戸訳。第一章 **原始種族の宇宙観** 最も幼稚なる、発展の最下級にある人類は、只其日其日を追ふて生きるのみ。明日といひ、昨日といひ、その日々の生活と直接交渉するもの以外には、彼等に何等の興味をも与へざるなり。宇宙及び其発展に関する問題の如き、彼等に取りては、過去に於ける地球の外観如何を問ふが如く、馬耳東風の観なき能はざるなり。

■寺田訳。I **宇宙の生成に関する自然民の伝説** 発達の最低段階にある民族は唯其日其日に生きて行くだけのものである。明日何事が起らうが、又昨日何事が起ったにしたところが、それが何か特別な其日其日の暮らしむきに直接関係しない限り、彼等にとってそれは何等の興味もないことである。宇宙といふものに就て、或は其の不断の進展に就て、何等かの考察をして見るといふやうなこともなければ又此の地球の過去の状態が凡そ如何なるものであったかといふことについて何等かの概念をもつといふ事すら思ひも寄らないのである。

文語文と口語文という大きな違いは、旧派と新派の違いを思わせ、前者に抵抗を感じるのはやむを得ない事だ。一戸訳は、原文の大意を捉えて読者に伝え、ぐんぐん先へ進もうとする強い意志が感じられ、寺田訳からは、委曲をつくして語ろうとする原文の細かいひだに即して、忠実な訳文を作ろうとする繊細で柔軟な姿勢が感じられる。なお一戸訳はこのあと、出版社を大鏡閣に変え、書名を『宇宙創成史』と改題し、大正10年(1921)12月10日付けで出版された。

## (2) アーレニウスの印象

この文庫を手にした人は、きっと、訳者がアーレニウスを訪問した時の印象を語る美しい文章に心

惹かれるに違いない。少し長くなるが引用してみよう(…は中略を示す)。

訳者は一九一〇年夏ストックホルムに行った序をもって同市郊外電車のエキスペリメンタル・フェルデット停留所に近いノーベル研究所にこの非凡な学者を訪ねた。… やつとのもので此世界に有名な研究所の在所を捜しあてて訪問すると、すぐプロフェッサー自身で出迎へて、さうして所内を案内してくれた。西洋人にしては短軀で童顔鶴髪、しかし肉つき豊で、温乎として親しむべき好紳士であると思はれた。… 別刷など色々貰って、御茶に呼ばれてから、階上の露台へ出ると、其処には小口径の望遠鏡やトランシットなどが並べてあった。〈これで a little astronomy も出来るのです〉と云って、にこやかな微笑を其童顔に泛ばせて見せた。眞に学問を楽しむ人の標本をこゝに眼のあたりに見る心持がしたのであった。

詩人の尾崎喜八はその著『碧い遠方』でこの部分を引用し、「その僅か数行から成る極めて簡潔な文章が、学問の世界で卓越した人々の晩年の平和な生活に対する吾々のあこがれをそそのものである」(角川文庫。1951. 9. のうち「湖畔の星」p. 211~215)と記しているが、共感を禁じ得ない。訳者の文章はこのあと「この現在の翻訳をするやうに勧められたときに訳者が喜んで引受ける気になったのも、一つにはこの短時間の会見の今はなつかしい想出が一つの動力としてはたらいた為である」と続き、本訳書成立の契機を知る事が出来る。

### (3)年代の誤り

前節で引用した「訳者は一九一〇年夏ストックホルムに行った…」の年代は、寅彦の思い違いで、正しくは一九〇九年である。このことは、没後『全集』が編集・出版され、留学中の日記が翻刻されたことにより判明した。「北欧旅行記」の明治 42 年(1909) 8 月 28 日(土)の個所に以下のような訪問の記録がある(『全集』19 巻. p. 153)。

Prof. Arrhenius の家を尋ねあちこち彷徨いたる後漸く尋ね当る。先生自ら出でゝ案内さる。… 高き Balkon あり此処にて各種の Photochemie 等の実験をなすを得といふ。周囲の眺望絶佳なり。別刷など貰ひて辞し再び電車にて帰る。

テキストを訂正することは許されないが、〈編集者註〉により読者に注意を促すことは可能であった。因みに、旧版『全集』(16 巻. p. 102)は、この個所に正しい年次を注記している。

### D. 書評紹介

本書出版の翌月の末、石原 純が書いた書評が出た。内容紹介のあと次のように記す。

最後に訳述に関しては私にはほとんど挙げるべき難点を見出さない。よく砕けた文章が十分に原著の意

を我々に伝えられることを寧ろ訳者に感謝したいばかりである。原著者を〈学界における一つの彗星のやうなものであった〉と評される訳者寺田寅彦博士自身もまた然うであるかも知れない(「帝国大学新聞」 409号. 1931. 11. 30. p. 4).

翌年早々「Z. I.」なる署名で、各章の要約と図版を転載した長文の紹介が出た。

最後に、訳者としての寺田博士が特に原著者その人に対して無限の親しみを感じ、且つ恐らくは本書の内容に対しても多大の興味を有せられ、その上で最も忠実に訳述の難事を果されたことは、この訳書の価値をこの上なく高めるものである(「科学」2巻1号. 1932. 1. p. 17~19).

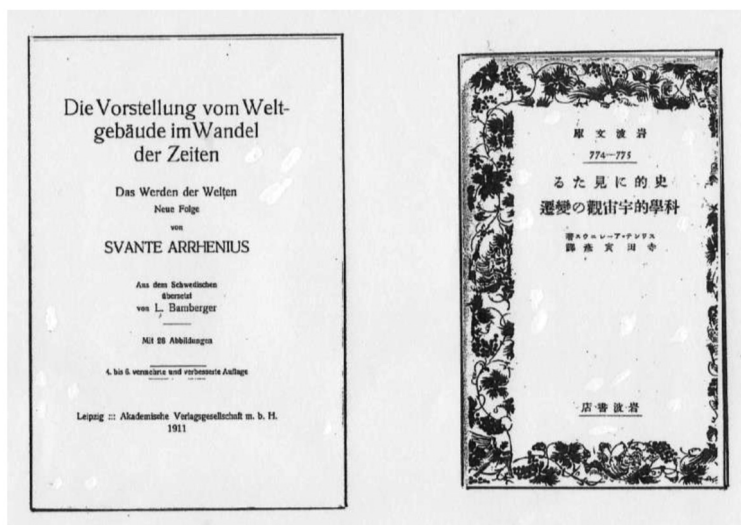
近年の文献に、小岩昌宏「アレニウスと反応速度論-伝記に見るその人間像」(「まてりあ」日本金属学会. 39巻1号. 2000. 1. p. 58~62)がある。アーレニウスの人柄にふれ、「ノーベル賞受賞者の決定をめぐるアレニウスの権謀術策は、Crawford の伝記(註)に詳しく記されており、それを読むと寺田寅彦が描く〈温和な紳士〉とは裏腹なイメージが浮かんでくる」と述べている。(註): Elizabeth Crawford: *Arrhenius From Ionic Theory to the Greenhouse Effect*, Science Publications/USA, 1996.

#### E. 重版(刷)の調査

この本の〈版を重ねる〉様子を調べた。これにより、長年月にわたり持続して、読者にいかによく受容されて来たかが分かるだろう。

[初版] 昭和 6. 10. 15. / 3刷 : 昭和 7. 7. 15. / 4刷 : 昭和 8. 5. 20. / 5刷 : 昭和 9. 6. 15. / 7刷 : 昭和 11. 2. 15. / 8刷 : 昭和 11. 7. 30. / 10刷 : 昭和 13. 4. 30. / 13刷 : 昭和 16. 7. 1. / [改版] 1刷 : 昭和 19. 8. 20. / [改版] 1刷 : 昭和 26. 12. 15. / 15刷 : 1954. 5. 10. / 17刷 : 1987. 4. 8. / 18刷 : 1996. 3. 7. / 19刷 : 2017. 2. 21.

■大森一彦編『人物書誌大系 36・寺田寅彦』(日外アソシエーツ. 2005) のデータ(p. 256)を増補。



アーレニウスの原書のタイトルページ(左) / 寺田寅彦の訳本の初版表紙(右)